VOCALIDO　自己解釈ストーリー

◇綿雪ましろ◇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＶＯＣＡＬＩＤＯ　自己解釈ストーリー

【Ｎコード】
Ｎ０６７５ＢＡ

【作者名】
◇綿雪ましろ◇

【あらすじ】
ボーカロイド作品で自分が好きな曲を自己解釈しつつストーリー風にしてみました。
気まぐれで更新する予定なので、定期的な連載にはならないかもしれません。

カゲロウデイズ（前書き）

※あくまでも自己解釈に過ぎませんので、「ここはこういう感じだろｗｗｗ」みたいなコメントは控えてください。

カゲロウデイズ

――だから夏は嫌いなんだ。

？カゲロウデイズ？

◆◆◆

八月十五日。時刻は午後十二時半ぐらいだった。
雲一つない晴天だった。病気になりそうなほど眩しい日差しの中、することもないから俺は君と駄弁っていた。
「目も眩むような日だね」
「全くだ」
少女は笑って言う。何が楽しいのやら。
公園のベンチ。彼女は元気に駆け回る子供達を眺めながら、ただ膝の上で丸まっている猫を撫でている。
「元気だねぇ」
「全くだ」
「さっきからそればっか」
「……きっと、夏だからだろ」
グラウンドを転がりまわるボールを追い回す子供達を見て俺はため息を漏らすようにそう呟いた。
本当に全く、忌々しいったりゃありゃしない。何がそんなに楽し

いのやら。

夏はこんなにも、長いのに。

「でもまぁ夏は嫌いかな」

俺の表情から気持ちを汲み取ったのか知らないが、彼女はふてぶてしく呟いた。

意外に思った俺は素直に口にする。

「へぇ。俺は君は夏が好きだと思ってたよ」

「大嫌いだよ」

彼女がそう言って微笑む。俺はそんな笑顔と相応しからぬ言葉に唖然とした――と同時に、猫が唐突に彼女の膝から飛び出して走り出した。

「待って！」

途端に彼女がその猫を追う。

――ッ！

猫が向かう先は交差点。脳裏に焼きつくのは、最悪な光景。

「行くなっ！」

駆け出す。

猫は道路のど真ん中でその猫はちょうど止まった。――まるで、何かを狙ったかのように。

彼女もそんな猫を抱きかかえようと、交差点へと飛び出した。信号機の色は、真っ赤だった。

――バッと通ったトラックが、君を引きずって泣き叫ぶ。

――血飛沫の色、君の香りと混ざり合ってむせ返った。

伸ばした手の先。そこに彼女の姿は、ない。
失意の下、ふと気配を感じて振り返る。
――嘘みたいな陽炎が「嘘じゃないぞ」って嗤ってる
俺は空を仰ぎ見る。
――夏の水色、かき回すような蝉の音に全て眩んだ。
暗転。

◆
◆
◆

目を覚ますと、俺は針の音がやけに響く時計をベッドに寝たまま確認した。
八月十四日の十二時ぐらい。やけに煩い蝉の声が耳につく。
――でもさぁ、少し不思議だな。
――同じ公園で昨日見た夢を思い出した。
少女は昨日と同じように、膝の上で気持ちよさそうに眠る猫を撫でている。
「うん？　何が」

「いや、昨日もこんな光景を見た気がするんだよ」
「……」
少女はそう言うと黙り込んでしまった。ただ、時間が無為に過ぎていく。
所在無く、時計を確認すると、時計の針がそろそろ昨日のアノ時間を誘うとしていた。

――「今日はもう帰ろうか」

彼女の手を取り、無理やり立たせる。驚いた猫が迷惑そうに彼女の膝から飛び降りた。
それでいい。俺は彼女の手を引いたまま公園を抜け道に出た。

――周りの人は皆上を見上げ口を開けていた。

とん、と彼女が俺のことを押す。不意の出来事に、俺はそのまま彼女の手を離し――

――落下してきた鉄柱が君を貫いて突き刺さる。

――劈く悲鳴と風鈴の音が木々の隙間で空回り。

道に響く絶叫が、やけに遠くに聞こえる。
失意の下、ふと気配を感じて俺は振り返る。

――ワザとらしい陽炎が「夢じゃないぞ」って嗤ってる。

あぁ、やっぱりこれは夢なんかじゃなくて――
ふらりと体が揺れた。意識が途切れる間際、俺は彼女のほうを見た。

――眩む視界に君の横顔、笑っているような気がした。

暗転。

◆
◆
◆

暗転。暗転。暗転。暗転。暗転。暗転。暗転。暗転。暗転。暗転。
暗転。暗転。暗転。暗転。暗転。暗転。暗転。暗転。暗転。暗転。
暗転。暗転。暗転。暗転。暗転。暗転。暗転。暗転。暗転。暗転。
暗転。暗転。暗転。暗転。暗転。暗転。暗転。暗転。暗転。暗転。
暗転。暗転。暗転。暗転。暗転。暗転。暗転。暗転。暗転。暗転。
暗転。暗転。暗転。暗転。暗転。暗転。暗転。暗転。暗転。暗転。
暗転暗転暗転暗転暗転暗転暗転暗転暗転暗転暗転暗転暗転暗転暗転
暗転暗転暗転……

◆
◆
◆

何度こんなことを繰り返したろう。
――何度世界が眩んでも陽炎が嗤って奪い去る。
永遠のような夏に、俺はいい加減飽き飽きしていた。

――繰り返して何十年。もうとっくに気が付いていたろ。
彼女を救うには、きっとこうするしかないのだろう。
――こんなよくある話なら結末はきっと1つだけ。
永遠の夏の果て。
――繰り返した夏の日の向こう。

◆
◆
◆

八月十五日の午後十二時半くらいのこと。
猫を追いかけた君を押しのけて、俺は道に躍り出る。
――バッと押しのけ伸びこんだ、瞬間トラックにぶち当たる。
見えるのは鮮血。でも、それは君のじゃない。
――血飛沫の色、君の瞳と軋む体に乱反射して
得意の下、ふと気配を感じて俺は振り返る。
――文句ありげな陽炎に「ざまぁみろよ」って笑ったら
――実によくある夏の日のこと。そんな何かがここで終わった。
転換。

◇　◇　◇

私は目を覚ました。日付を確認する。
……八月十四日。
時は進んでいない。

――「またダメだったよ」

少年は、？また？死んだ。
私はただ、一人猫を抱きかかえていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0675ba/

VOCALIDO　自己解釈ストーリー

2012年1月2日09時52分発行